

平成 21 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006-2008
 課題番号：18530398
 研究課題名 (和文) 現代青少年の対面的コミュニケーションに関する文化社会学的研究
 研究課題名 (英文) A Research based on Cultural Sociology for a Face-to-face Communication among Contemporary Japanese Youths
 研究代表者 芳賀 学 (HAGA MANABU)
 上智大学・総合人間科学部・教授
 研究者番号：40222210

研究成果の概要：従来、メディア・コミュニケーションや数量的調査に偏りつつあった研究動向を補完し、現代日本の若者たちのコミュニケーションの新しい側面を捉えるために、本研究においては、「よさこい系祭り」という一群の文化現象を事例として取り上げて、フィールドワークを実施した。その結果、若者たちにとっても、非日常空間における対面的コミュニケーションが依然として大きな魅力を保持していることが確認されると同時に、その提供のスタイルには従来と異なる大きな変化が発見された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：文化社会学・宗教社会学・青年社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学(3801)

キーワード：文化、若者、対面的コミュニケーション、祭り（祝祭空間）、アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

(1)若者のコミュニケーション・スタイルへの批判

現在も事情は基本的に変わっていないが、本研究を開始するに当たっては、日本の若者に関する言説において、1990年代中盤以降顕著に見られる、つぎのような傾向が大きな影響を与えている。

いわゆる「バブル経済崩壊」に始まる、この時期は、若者文化が社会のトレンドの最先端を表すものとして高く評価された1990年代前半までとは一転して、「オタク」・「パラ

サイト・シングル」・「ニート」など、若者の生態に関する新たな造語が つぎ つぎに考案され、社会に流布されることによって、彼/彼女らのライフスタイル自体が社会問題視された時期でもあった。

具体的には、この時期に、自分の好きな対象にはマニアックに熱中し、自分とセンスの合う仲間には異様な気遣いをする一方で、職場や地域において他の世代の者との濃厚な人間的接触を避けたり、公共の場で傍若無人な振る舞いをしたり、自分の世界に引きこもったりするなどの例が、いかにも当代の若者

を代表するかのようになり、マスコミなどで取り上げられては、批判的な視線が繰り返され注がれつつけられてきた。こうした言説の中には、①「将来をよく考えず実現不可能な「夢」ばかりを追いかける『フリーター』に代表されるように、若者は、労働意欲が低く安易な転職を繰り返すがゆえに、社会の活力を低下させる」、②「世間を騒がせる少年凶悪事件の犯人に代表されるように、他者に理解不能なライフスタイルに没頭し、現実の人間関係において『キレイやすさ』を孕むことで社会の治安を悪化させる」など、若者固有とされる傾向自体が直接的に社会的な弊害を生むものとする議論さえも含まれていた。

(2) 実態を踏まえない議論の横行

こうした議論の中で、本研究が特段の注意を払いたいのは、若者たちが、家族・友人・職場の同僚などといった身近な人間関係やそこで展開されるコミュニケーションに関して、従来の世代とは異なった志向性を持っているとしばしば語られてきたことである。そこでは、若者たちは、かつての共同体のような、直接的で濃厚な(=「温かく」「人間味のある」)対面的コミュニケーションを好まず、ゲームやアニメのようなバーチャル世界やメディアを介した間接的なコミュニケーションを志向していると述べられている。しかし、この種の議論は、さまざまな機会に語られてはいるものの、その多くが、現在進行中という点を差し引いても、個人的で断片的な印象をつなぎ合わせて語られたもの(=エッセイ)であり、かなり科学的な根拠の弱いものである。実際には、「若者たち全体にこうした傾向が存在するのか、しないのか」、「存在するとして、それは、若者たちに固有のものなのか、それとも現代日本人全体に一般的なことなのか」といった、ごくごく基本的な実態さえ必ずしも明らかではない。ましてや、それが日本社会に何をもちたらすかは、多くが憶測の範囲を超えるものではない。

2. 研究の目的

(1) 戦略的な現状把握の必要性

それゆえ、本研究は、従来の言説の真偽を社会学的な観点から是正することを中長期的な目標として、まずはそのための基礎資料としての正確な実態把握に努めることを第1の目的としている。それゆえ、現代日本の若者たちのコミュニケーションの全体的把握はこの研究において必要不可欠な作業である。

しかし、ここで掲げた現代日本の青少年のコミュニケーションの全容解明という課題を遂行するには、膨大な作業が必要であり、

人員・時間・費用のいずれをとっても、本研究の規模をはるかに越える。しかも、幸いなことに、主として大規模な質問紙調査によって、現代日本の若者の意識と行動に迫ろうとする研究は、既にかかなりの蓄積がある。

こうした例としては、たとえば、官公庁やマスコミによる世論調査に加え、千石保(『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会、1991年、『新エゴイズムの若者たち』PHP研究所、2001年)や私自身も所属する青少年研究会(高橋勇悦監修『都市青年の意識と行動』恒星社厚生閣、1995年、富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣、1999年、浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房、2006年、羽渕一代編『どこか(問題化)される若者たち』恒星社厚生閣、2008年)が行った数量調査に基づく研究などを挙げることができる。また、近年の動向については、山田昌弘による一連の著作(『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房、1999年、『パラサイト社会のゆくえ』筑摩書房、2004年、『希望格差社会』筑摩書房、2004年)や土井隆義の著作(『非行少年の消滅』信山社、2003年、『友だち地獄』筑摩書房、2008年)なども参考になる。

そして、さらに、これまでの若者研究の中には、本研究と同様に、フィールドワーク的な手法を用いたものもある。たとえば、宮台真司(『制服少女の選択』講談社、1994年、『透明な存在の不透明な悪意』春秋社、1997年)や伊奈正人(『若者文化のフィールドワーク』草書房、1995年)などの業績はその代表格である。

このうち、前者の数量的調査で得られたデータに基づく業績からは、先に挙げた、現代日本の若者たちのコミュニケーションの全体的傾向を概括的に捉えることができる。ただし、これらの研究には、若者を均質な1つのかたまりとして扱うがゆえに、平均的なイメージの提出に終始しがちであるという弱点もある。そこで、それを補完するのが、後者のフィールドワークにもとづく研究であるが、ここで挙げたものは援助交際や神戸児童殺害事件など、時代的に1990年代を扱っており、2000年代に入ってからの変化を追えていない点に問題があると思われる。

それゆえ、本研究においては、以上のような実証的な研究の動向を踏まえて、日本の若者のコミュニケーションのとある一面とその可能性を考えるために、コミュニケーションが取り結ばれる空間の中でも、2000年代の現在に特徴的と目される場(ないし集団)を戦略的に選定し、フィールドワークを中心に作業に当たることとした。

(2) 対面的コミュニケーションへの着目

さらに、本研究で対象とする若者たちのコ

コミュニケーションについては、基本的に対面的に行われるものを中心に据えることとした。その理由は以下のとおりである。

若者たちのコミュニケーションに関する従来の議論は、しばしばその新しさや変化といった側面を重視しがちであった。そこには、ある種必然的ともいえる根拠がある。なぜならば、従来のコミュニケーション・スタイルに慣れた上の世代が、自分たちと異なる若者たちの新たなコミュニケーションに違和感や嫌悪感を持つことは当然のなりゆきであるし、これまでの研究者たちが、若者たちの新しいスタイルを調査し、現在進行中の社会の変化やこれからの将来像を読み解こうと試みるのにも一定の意味が存在するからである。

そして、こうした観点から議論が行われる際に、若者固有のコミュニケーションを読み解く素材として注目を浴びてきたのが、インターネット（チャット、ブログ、ソーシャル・ネットワーク・サービスなど）や携帯電話（主としてメール）などを介したメディア・コミュニケーションの急速な発達進化である。この傾向には、当初それ相応の利点やある種の説得力も存在したが、その一方で、この種の若者研究の横行には弊害も存在した。それは、メディア・コミュニケーションへの注目とそれを対象とする研究の蓄積の反面で、対面的コミュニケーションが不当に軽視されてきたことである。

確かに、90年代中盤から急速に進展してきた、インターネットや携帯電話に代表されるメディア・コミュニケーションに比べれば、対面的コミュニケーションは、古典的であり、若者に限らず、全世代が共有するそれ自体は珍しくもない技法である。それゆえ、ことさらに目を引く新規さには欠けるし、ましてや「若者の問題行動は、〇〇（インターネット・携帯電話・ゲーム）のせいだ」などといった短絡的な論理のもと、社会問題化した若者の行動の原因として名指しすることもむずかしい。しかし、上の世代から若者世代への移行は、一時期横行した議論で言われたように、対面的コミュニケーションからメディア・コミュニケーションへの劇的な移行だけを意味しているわけではない。それゆえ、後者の登場（と拡大）だけを過度に問題視することは事態の正確な把握をむしろ妨げるものである。

ただし、ここでこのように述べたからと言って、コミュニケーション・スタイル上、若者世代と上の世代との間に何の変化もなかったと私が考えているわけではない。強調すべきは、ここ10年余りの間に進行してきた変化はより複雑であり、インターネットや携帯電話などのメディア・コミュニケーションの普及は、一部のヘビーユーザーを除けば、

それへの全面的な依存を生むのではなく、いわば対面的コミュニケーションとの新たな使い分けを生んでいるのだということである。要するに、過去に郵便や固定電話が普及した時にも起こったことが、形を替えて、現代社会にも生じているのであり、メディア・コミュニケーションだけに視野を限定しないで、新しい使い分けの様相を明らかにし、その功罪を吟味することが今や重要であると確信する。

そこで、本研究では、再度、現代の若者たちの対面的コミュニケーションを中心的な対象に据え、その実態と変化を精査し、それがメディア・コミュニケーションの発達した現代にあつて、どのように提供され、いかなる役割を与えられているのかの解明を目指すこととした。具体的には、対面的なコミュニケーション空間に対象を限定し、調査の期間内に、その中で取り結ばれるコミュニケーションの特徴、機能、背景にある社会的コンテキストといった点に関して取り組むこととした。

(3) 研究対象の選定

本研究では、フィールドワークの対象として、当初、いくつかの活動を探索的に取り上げたが、次第にその中心は、私がこれまで研究してきた宗教や精神文化に加えて、高知市で1954年に開始された「よさこい祭り」を起源とする祝祭空間群（「よさこい系祭り」とそのチームの活動に収束することになっていった。

その理由は、主として3つある。まず、その1つ目は、札幌の「YOSAKOI ソーラン祭り」を皮切りに、1990年代以降、日本全国に伝播拡大するなど、この種の祝祭空間が現代社会にきわめて適合的であり、かつ若い世代の人々の関心を大規模に集めることに成功していることである。若者文化が隆盛を失って久しい現代日本社会においては、こうした現象は、他に皆無とはいえないまでもきわめて稀有であるといえよう。それゆえ、こうした特徴は、本研究のテーマである現代日本の若者たちのコミュニケーションの新たな動向と可能性を分析するにはまさに打ってつけの素材であるといえよう。

2つ目の理由は、こうした研究上の利点が存在するにも関わらず、これまでに行われてきた本格的な研究は地理学や文化人類学的な観点からのものに偏る傾向があり、メンバー間ないし踊り手-観客間で取り交わされるコミュニケーションやさまざまなステークホルダー間の関係などに注目した社会学的研究は、管見の限り、皆無に近いことである。その分、新たな知見が期待できる可能性が高いと判断した。

そして、3つ目は、私がこれまで続けてい

た研究との関連における理由である。私自身は、これまで新宗教や「スピリチュアリティ」や「ヒーリング」といった用語で指示される現代精神文化の研究を20数年来続けてきた。その点、「よさこい系祭り」と宗教（ないし精神文化）とは、非日常的で対面的なコミュニケーション空間という点で共通性がある。それゆえ、宗教研究の方法や仮説を導入したり、両者の成果を比較したりすることがある程度可能であると考えた。

3. 研究の方法

上記の課題を遂行するために、本研究で取られたデータ収集の方法は、以下の5つである。

(1) 関連の文献資料の収集

まず、第1に、初年度より最終年度まで、随時、現代日本の若者の意識や行動に関する文献と、事例として取り上げる「よさこい系祭り」に関する文献の収集と分析を行った。具体的には、この期間中、折を見て、関連の書籍・学術論文などを収集したが、「よさこい系祭り」に関しては、そのほかにも、大宅壮一文庫を利用した雑誌記事の収集やインターネット（HP）を通じての祭りやチーム情報の収集をも合わせて精力的に行った。特に、最後の祭りやチームに関する情報に関しては、関東圏に限定した上で、研究協力者の田村公人氏に依頼して、データベースの形に整理した。

(2) 見学と資料収集

第2に、若者たちが対面的にコミュニケーションを取り交わす現場に直接調査に出かけた。具体的には、初年度（2006年度）には、高知「よさこい祭り」をはじめ、「彩夏祭関八州よさこいフェスタ」（埼玉県朝霞市）、「坂戸よさこい」（埼玉県坂戸市）、「原宿表参道元氣祭りスーパーよさこい」（東京都渋谷区）、「ふくろ祭り東京よさこい」（東京都豊島区）、「よさこい東海道」（静岡県沼津市）などの「よさこい系祭り」と、比較対象のために選んだ徳島「阿波踊り」、「東京高円寺阿波おどり」（東京都杉並区）に出かけ、翌2007年度には、札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」をはじめ、東京圏で行われる「よさこい系祭り」を訪問（または再訪）し、最終年度（2008年度）には、次項目で紹介する3チームのフィールドワークに付随して、彼/彼女らが参加する祭りやイベントに可能な限り出かけた。こうした機会には、①祭り自体の雰囲気やその中で行われるチームの演舞を直に目にするだけでなく、②会場で配布（または頒布）されているパンフレットなどの資料を手に入れたり、③必要と認められる場合は、地元の図書館にまで足を延ばして、収集されている地元の新聞や地方自治体の広報などの中から関連の記事などの資料を収集したりすることに努めた。

入れたり、③必要と認められる場合は、地元の図書館にまで足を延ばして、収集されている地元の新聞や地方自治体の広報などの中から関連の記事などの資料を収集したりすることに努めた。

(3) 練習の継続的な見学

第3に、最終年度となった2008年度に、それまでの蓄積を踏まえて、在京の「よさこい系祭り」のチームの中から、それぞれ母体を異にする、地域チーム「原宿よさこい連」、企業チーム「東京メトロ群青（シーブルー）」、大学生チーム「早稲田大学“踊り侍”」を選定し、依頼して、3月（4月）から11月までの1シーズンにわたって継続的に練習の見学を実施した。平日（土曜日を含む）の晩や日曜日の日中に行われる各チームの練習に定期的に通ったことで、チームが1年間どのように活動し、その年の演舞をいかにして作り上げていくのかを知ることができたばかりではなく、メンバーの出入りやメンバー間のコミュニケーションに関しても貴重な情報を得ることができた。通常、私は会場の片隅で気がついたことをメモにとり、晩に清書版のフィールドノートに加工・記録し、後に突き合わせて分析を進めた。

(4) インタビュ・インタビュー

第4に、初年度に、札幌の地域チーム「新琴似天舞龍神」の梶浦宣明総代に探索的なインタビューを行ったほか、2008年10月下旬から11月中旬にかけて、練習の継続的な見学で培った信頼関係と知識をもとに、先の在京3チームの代表をはじめとする役員と踊り子、計20名ほどに対して、1回2時間程度のインタビュ・インタビューを行った。これらの機会には、各個人がチームに加わった経緯と動機、この活動への思いややりがい、チーム内の人間関係やコミュニケーションの状況などについて詳しく聞いたほか、相手がチーム事情に詳しい人の場合には、チームの立ち上げやここまでの歴史、役職者としての苦勞、チームの運営や現在抱えている問題点などについてもお話をうかがった。

(5) 質問紙調査

そして、第5に、やはり、上記の3チームに依頼し、許可を得て、シーズンオフに入ったばかりの2008年11月から12月初旬にかけて、順次チーム・メンバーへの質問紙調査を実行した。質問紙の作成は、私の監督・指導のもと、私自身と調査員となった学部生達とで共同で行い、「原宿よさこい連」と「早稲田大学“踊り侍”」の場合には、チームの役員に、メンバーへの配布と回収を依頼する形で、「東京メトロ群青（シーブルー）」の場合には、イベントの休憩時間を利用して、集

まったメンバーに一斉に記入してもらう（集合調査法の）形式で実施した。ちなみに、有効回収数は、「原宿よさこい連」29部、「早稲田大学“踊り侍”」39部、「東京メトロ群青（シブルー）」32部の計100部であった。データは、統計処理パッケージソフトに入力・変換して、分析を行った。

4. 研究成果

本調査で得られたデータは、多岐にわたり、その中には、質問紙調査の結果の大部分がそうであるように、数量的なものもかなり含まれてはいるものの、そのほとんどが質的なものであった。そのため、コンピュータやデータ処理ソフトの利用には限界があり、結果、データの整理・解析には膨大な時間が必要であり、作業は残念ながら現在も進行途中である。ここでは、ここまでで解析しえた結果についてだけ、ごく簡単に紹介する。

(1) 祝祭空間の成立可能性

本調査で明らかとなったことは、まず、第1に、1990年代後半から「よさこい系祭り」が日本全国に伝播拡大し、若者たちがそこに多く参加したことからわかるように、彼/彼女らにとっても、祝祭空間における対面的コミュニケーションの価値が今なおお色あせていないことである。観客に見られることによる緊張感、一緒に踊るメンバー同士の精神的交流、そして、そこから生まれる非日常的な昂揚感やチームの一体感などの魅力は、従来の祭りと同様、「よさこい系祭り」においても、変わることなく、きわめて濃厚に引き継がれている。このように、祝祭空間における対面的コミュニケーションが、今なお、人々を虜にするほどの大きな魅力を持つことは、実践者へのインタビューや質問紙調査の結果の中に顕著に表れている。このことから、少なくとも、現代日本の若者たちの全てが、祝祭空間において従来のように対面的コミュニケーションが取れないわけでも、取りたいと思っていないわけでもないことがわかる。それどころか、私には、日常的なコミュニケーション空間において、精神的交流や集団的な一体感を実現できる機会が減少している現代日本である分だけ、むしろそのインパクトは増加しており、機会さえあれば関心を持つ可能性のある人々は多く存在するように感じられた。

(2) 合衆型祝祭の進展

第2の知見は、非日常的な空間における対面的コミュニケーションの価値が現在でも認められるとはいっても、その提供の形態は、以前とは大分異なるものに変化しているこ

とである。同じように、非日常的なコミュニケーション空間である宗教活動においては、1980年代後半あたりから、信仰共同体としての宗教団体が忌避され、「スピリチュアリティ」や「ヒーリング」などの用語で指示されるサービス産業型やネットワーク型の組織を持つ活動が選ばれる傾向が次第に増してきたことが知られている。これと基本的には同種の傾向が、祭り集団の変化の中にも明確に見て取れる。

近世期に成立したと思われる、伝統型の祭り集団は、町内という地縁組織を基盤に作られるのが通常であり、その土地に生まれぬ者はパフォーマンスに加われないのが通常のルールであった。しかし、2大中心地である高知と札幌をはじめ、東京圏などで、「よさこい系チーム」の実態を調べてみると、地域（地縁）、企業（職縁）、学校（学校縁）といった母体となる集団はあっても、その多くが人員的にも経済的にも運営的にもそこから実質的に独立したクラブチーム（関心縁）としての顔を濃厚に持っていることがわかる。さらに、この種のチームでは、練習や祭り（イベント）への参加が基本的にメンバー各自の自主性に任されていたり、メンバーが1年ごとに大きく入れ替わったりするなど、共同体や強固な集団としての色彩が大きく後退していることもわかる。そして、さらに、この種のチームは、特定の祭りに本拠を置きつつも、その専属では決してなく、活動的なチームほど1年間に数多くの祭りを全国を股にかけて渡り歩いていることにも気づく。

こうした傾向は、祭りの社会学者である松平誠が1970年代に高円寺阿波おどりを事例として提出した「合衆型祝祭」というモデルに基本的に当てはまるものである。ただし、30年あまりが経過した現在からみると、「よさこい系祭り」の方が高円寺阿波おどりよりもはるかにその図式に適合的であり、この間に日本全体の祝祭空間の中でこの種の傾向にかなりの進展が生じたことがうかがわれる。その結果として、現在の「よさこい系祭り」においては、伝統型において強固であった、祭り・チーム・踊り子の3者間の結びつきがかなり弱い独特の構造を持つことが確認される。

(3) 合衆型祝祭の進展がもたらすもの

本研究の3つ目の知見は、合衆型祝祭の進展に伴って、祝祭空間自体の構造が現在大きく変化しつつあるのではないかということである。

図1 祝祭空間の構造図

	舞台	実行	見物
伝統的な祝祭	地元	地元	地元
観光化した祝祭	地元	地元	外部者

よさこい系祭り 地元 外部者 外部者

図1に示したように、伝統的な祝祭空間は、町内といわれる地縁の共同体を単位として、地元の人々によって、支えられ、実行され、楽しまれるものであった。それが、第2次世界大戦後の高度経済成長期に有名な祭りを中心に観光化が進み、舞台と実行は地元が担うものの、見物するのは外部から訪れる観光客という構造が出来上がっていく。それが、現在増殖している「よさこい系祭り」の場合には、内部にいろいろなタイプのもが含まれているとはいえ、実行する人々の間にも外部からやってくる踊り子の比重が増す傾向が見られ、結果として地元は舞台の提供のみに専念する傾向が強まりつつある。そして、この傾向が、祭りに対するチームの関わりやチームに対する踊り子の関わりに大きな自由と多様な参加形態を可能にする一方で、祭りやチームの運営にこれまでにないさまざまな困難や問題を生み出しているのである。一見、順調に発展してきたように見える「よさこい系祭り」の今後は、これらの問題にどのような安定した答えを見つけられるかにかかっているととっても過言ではあるまい。

(4) データベースの作成

最後に、今までの知見とは別に、本研究の成果として、先述したように、関東圏の「よさこい系祭り」とそのチームの実態に関するデータベースを完成したことを強調しておきたい。このデータベースには、さまざまな機会に収集した祭りのパンフレットやインターネット上のHPのデータなどを整理して、2007年度開催の138の「よさこい系祭り」の活動実態（開催日・開催回数・参加チーム数）と661の「よさこいチーム」の動態（チーム所在地・主要な14の祭りへの参加状況）に関する情報を集約した。基本的に、私の監督のもと、研究協力者である田村公人氏の尽力によって作られたものだが、この種のデータベースは、他に類例の全くないものであり、この種の祝祭空間を研究するための基礎資料としての意味合いは決して小さくないものとする。現在のところ、その分析は、いまだ途上であるが、簡単どころでは、祭りやチームの分布からはじまって、祭りやチームとの新たな関係などを考える上でも貴重な裏付けを与えてくれるものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 芳賀学、「祝祭空間の現代の変容－「よさ

こい系祭り」の全国伝播を事例として」『上智大学社会学論集』32、27-48頁、2008年、査読無。

② 芳賀学、「分野別研究動向(宗教)－固有領域融解への諸対応」『社会学評論』58-2、205-220頁、2007年、査読無。

③ 芳賀学、「宗教と経済の新世紀－ボーダーレス化する現実を前に」『経済社会学会年報』29、19-24頁、2007年、査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

芳賀 学(HAGA MANABU)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：40222210

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

田村公人(TAMURA KIMIHITO)

上智大学・大学院文学研究科・博士後期課程

研究者番号：なし